

●特別賞

生徒に発見の喜びを持たせる カード掲示の授業

杏林大学総合政策学部 みずの みすず
水野美鈴



I はじめに

私の中学校教員生活38年間のうち前半20年間は、ほとんどが生活指導困難校での勤務だった。校内暴力が荒れ狂い、授業の成立自体が難しい。こうした学校では、事前の板書計画どおりに黒板に美しくまとめたり、教師の一方的な説明・解説を聞かせるだけの授業はできない。スピード感をもって授業を進め、生徒を授業に巻き込み、「楽しい」「おもしろい」「活動的だ」「よくわかった」と実感させることが大切だった。

私の授業は、生徒の主体的な活動を重視するものや、カードや模造紙の掲示によって視覚にも訴えて理解を促進するものや、作業しながら生徒が自然に約束事に気づいたりするものが多い。こうした授業スタイルは、荒れた学校での授業経験の中から生まれた。

この論文では、授業者の一方的な説明や解説になりがちな「法則」「きまり」などの知識を教える授業を、カード掲示方式の採用によって活気あるものにできた実践を紹介する。

II 「法則」「きまり」などの知識を教える指導の課題と解決策

1 現在行われている「法則」「きまり」などの知識を教える指導では何が問題なのか

文学的な文章や説明的な文章の指導では、生徒の主体的な活動を重視し、授業者は支援の側

に回って指導する授業が多くなってきている。しかし、文法・漢字の取り立て指導、古典の「知識」を教える部分、その他の法則、きまりなどの知識を教える学習は、依然として授業者の説明・解説を一方的に聞かせ、それを生徒に覚えさせる指導が多い。そのため生徒も教えられたことを覚えるのみで、「法則、きまりは後の人が言葉を分類、体系化していく中で作ったのだ」という意識を持ったり、自分で法則を発見できたという喜びを持ったりできないでいる。そうした授業に楽しさを感じてもいない。私は、こうした法則、きまりなどの知識を教える指導こそ生徒の活発な活動を取り入れ、頭や体を動かして学習する中で法則、きまりに気づき、発見の喜びを味わえるようにすべきだと考える。

2 どう解決しようとしたのか（どういう考えの基にこうした方法を考案したのか）

(1) 法則・きまりなどに生徒自らが気づき、発見できれば興味を喚起できる。

文法、漢字の成り立ち・二字熟語の組み立て、古典や詩歌の「知識」に関する部分など、法則、きまりがあるものは、初めからその法則やきまりがあったわけではない。世の中で使われている言葉を分類し体系化していく中で法則やきまりが生まれたのだ。生徒は、生まれた時から日本語に触れているのだから言葉を分類・体系化するヒントや機会を与えれば自分でその約束事

に気づき、発見の喜びを味わうことができると考える。教え込むのではなく言葉の一つ一つを積み上げ、全体を見渡すことによって法則・きまりを生徒自ら発見できるような指導をすれば興味・関心を喚起できると考える。

(2) **カード掲示方式にすれば一つ一つの言葉を集めたり全体を見渡したりしやすい。**

切り離された言葉の一つ一つを集め、まとめ、見渡すためには言葉の一つ一つがカードになっていると便利である。言葉の一つずつカードに書く。カードの裏面にマグネットを付け、黒板に着脱自在にしておく。すると自由にばらばらにすることも集めて一つの塊にすることもできる。生徒が黒板で1枚ずつカードを取り、「正解」と思うところに張ることができる。一人ずつ出てきて張ることもできるし、多数の生徒が出てきて一斉に張ることもできる。パワーポイントや実物投影機なども一つ一つを掲示したり全体を見渡したりできるが、一時に多くの生徒を巻き込んで行動させながら学習に参加させることは難しい。カード掲示方式は一時に多くの生徒を同時に行動させることができる。したがって、カード掲示方式にすると指導しやすく便利だと考える。

(3) **班やクラスで一体感が持て楽しい雰囲気を作り出せば生徒の興味を喚起できる。**

きまりや法則を学ぶ授業は、教え込むと堅苦しくなる。しかし、授業は「楽しい」ことが大切だ。知識の詰め込みだけだと本当の理解にはつながらない。体や頭を働かせ、黒板の前に出てきて迷いながらカードを張り替えたりする中で思考が活発になる。わからなければ周りの級友に相談することによって知識やものの見方・考え方が深まる。こうした「楽しさ」を取り入れるためにはゲーム形式にするとよい。正解に点数をつけ、それを班の得点にするようにすると、班の中で話し合うことによって学習が遅れている生徒も授業に参加でき、班やクラスの一体感や楽しい雰囲気も生まれると考える。

Ⅲ カード掲示方式の授業のよさは何か

1 生徒にとっての意義

(1) **法則・きまりに自ずから気づくことができる。**

カードを掲示していくうちに自然に法則や約束事に気づくことができる。「先生から教え込まれた」という意識ではなく「自分で発見できた」という満足感を持てる。

(2) **明るく活発な雰囲気在学习中。**

正解すると得点がもらえるので、ゲーム感覚で積極的に楽しみながら学習に取り組める。

(3) **連帯感、一体感が持てる。**

グループや席が近いメンバーが共に知恵を出し合いながら考えることができ、自分では気づかなかったことに気づくことができる。そのため級友と一体感が持て互いに仲よくなれる。また、学習が遅れている生徒も友人に相談したりして一緒に参加することができる。

(4) **視覚に訴えるので意見を持ちやすい。**

作業の進み具合がそのまま目に見えるので理解しやすく、級友の答えが正しいか正しくないか、自分の意見と同じか違うかなどがすぐに判断でき、自分の意見を持ちやすい。

2 教師にとっての意義

(1) **生徒に発見の喜びを持たせることができる。**

作業が終わって最後に生徒が黒板を見たとき、教えた知識が黒板にきれいに整理されていて、生徒は法則・きまりを自ずから理解できる。また、色画用紙、色模造紙などを複数使うことによって種類、性質の違いなどを意識させ、生徒の気づきを促進できる。

(2) **授業を活性化し、生徒の興味・関心を持続させることができる。**

生徒が体を動かしながら法則・きまりに気づいていくので、「教え込みがちになる授業」を減らすことができる。生徒の興味・関心を黒板に集中させることができ、授業が活発になり生徒が生き生きする。全てが一度に見えてしまう

と興味が失せるが、黒板に1枚ずつ張っていくことにより、次を予測させ、興味を持続させることができる。パワーポイントの手法に似ているが、前に掲示した物は消えず、そのまま黒板に残るので学習を積み重ねていくことができる。また、板書するより手早く、スピード感、リズム感を保って授業を進めることができるので生徒が飽きない。

(3) 教えたい知識を過不足なく教えることができる。

教えたいことはカードに全て書いてあるので、教えたいポイントを漏らしてしまうことがない。また、どのクラスでもカードに沿って生徒が発言するので、クラスのメンバーの違いや発言の良否などによる差があまり出ず、大切な事柄を教え漏らすことがない。

(4) いろいろな学習に応用可能で、一度教材を作ればいつでも使える。

工夫、アイデア次第で法則・きまりなどの知識を教えたいいろいろな学習に応用できる。また、一度教材を作っておけばまた次の機会に使うことができる（すぐ次の授業で、次のクラスで。来年。3年後…など）。

IV カード掲示方式はどんな学習に使用できるか

帰納法（個々の事実を積み重ねて法則を見いだすこと）で具体的な事実から共通点を探り、そこから法則・きまりなどの知識を教えたい学習に向く。そういう面では、文法の指導などには大変有効である。文法以外にもきまりごとや順序に気づかせたい学習に使える。

【使用例】

文法	ほとんどの文法知識を教える上で使える。例えば ①自立語・付属語の区別 ②品詞の分類（11種類の品詞の区別） ③体言の種類（固有名詞、普通名詞、数詞、代名詞、形式名詞の区別） ④「副詞」と「連体詞」の違い ⑤接続詞の種類《順接・逆接・選択・添加・説明など》 ⑥用言の活用の仕方 ⑦可能動詞（五段活用の動詞からでき、下一段活用になる） ⑧自動詞・他動詞の区別 ⑨助詞の区別（格助詞、接続助詞、副助詞、終助詞の区別）など
漢字	①漢字の成り立ち ②二字の熟語の組み立て など
短歌・俳句	①枕詞の働き ②序詞の働き ③序詞と枕詞の違い ④季語（俳句の季節の切り方）
古典	古語、歴史的仮名遣い、主語の省略など生徒にとっては難しく感じる点が多いのでカード・模造紙掲示は必須。例えば、①それぞれの古典本文の模造紙掲示、②絵の提示（登場人物の人形型を作り、主語に気づかせる等） ③対句の説明 ④漢文の読み方の説明（返り点など） ⑤押韻 ⑥絶句・律詩の区別 ⑦起承転結 ⑧歴史的仮名遣いの読み方のきまり など
文学的文章	①小説の書き出しの工夫 ②視点の移動 ③動詞の多用の効果 ④心情語を使わずに心情を表現する工夫 ⑤比喩の働き など
説明的文章	原文への復元学習（生徒が読んだことがない教材をカード形式で段落ごとに切り離し、順序をバラバラにして黒板に掲示し、元の文章に復元させる指導。）
その他	敬語の種類（尊敬語、謙譲語、丁寧語《美化語を含む》）の区別

V カード掲示方式の指導が特に効果的な実践例

文法指導の例2例、漢字の取り立て指導の例2例を紹介する。

1 11品詞の分類

- (1) 【所要時間】 50分
 (2) 【対象生徒】 中学1年生の終わりまたは2年生の初め
 (3) どんな時に使える教材か、どんな気づきや効果があるか

中学1年生の終わりまでに11品詞を一応教える場合が多い。しかし、多くの生徒はそれぞれの品詞の区別があいまいで、その特徴や働きがよくわかっていない。こうした段階の生徒に復習としてはっきりと品詞の区別、特徴を理解させたいときに有効である。または、11品詞を全く教えていない段階でもカードを張っていく中で自然とその特徴に気づかせることができるので、11品詞をまとめて、初めて教える学習としても使える。

(4) 指導のねらい

ア、11品詞の特徴に気づかせる。イ、11品詞の名前を理解させる。ウ、これまでに習った文法の知識の復習をさせる（自立語、付属語、活用、主語、述語、修飾語など）。

(5) 指導の手順と留意点

- ① 31枚の品詞のカードを黒板の左側3分の1程度に張る。カードは、「待つ」「おはよう」「それ」「晴れるらしい」「しかし」「なぜ」「君が」「あらゆる」「にぎやかだ」「飛行機」「赤い」「この」「来ます」「すばらしい」「話す」「学校で」「まじめだ」「鳴る」「美しい」「おやっ」「そして」「これ」「ゆっくり」「おだやかだ」「風」「私です」「とても」「彼女」「少し」「私」「拾う」の31枚。
 ② 黒板の残りの右側3分の2は、11のブロックにチョークで区切り、A～Kのアルファベットをそれぞれの右端に書く。
 ③ 生活班で机を四つ向き合わせにして、そ

の周りに班員全員が集まる。どのカード同士が仲間か1分間話し合う。

- ④ 順番に班から一人ずつ出てきてカードを1枚取り、A～Kのブロックの適当な所に張る。ただし、もしAに「ゆっくり」が張られたらその後はAには「ゆっくり」の仲間しか張れないことにする。他のブロックも同じ。あるカードが1枚張られた時からそのブロックにはそのカードと同じ仲間のカードしか張ることはできない。
 ⑤ 1回目の回り方は、1班→2→3→4→5→6班、次の回は、6班→5→4→3→2→1班というように不公平にならないようにする。どの班も15秒以内に出てきて張らないとその回は失格となるので、身構えて出遅れないようにするとともに班内で相談して班員の合意のもとに代表としてカードを張る。正解のカードが張られれば授業者が「ピンポン」、不正解は「ブー」と言う。不正解の場合は、そのカードは、もとあった場所に戻す。カード張りの段階は、正解1点で各班の得点を授業者が「正」の字で黒板に書く。
 ⑥ 全てのカードが正確に張れたら「2回戦」になる。今度は、なぜそのカード群が同じ仲間なのか共通する特徴を班の代表が順番に前に出てきて一つずつ言う。例えば「待つ」「話す」「鳴る」「拾う」のグループなら、「『ウ音』で終わる」「動作を表す」「活用がある」「述語になる」などが生徒から出る。それを各ブロックの空いているところに授業者が板書する。副詞、連体詞、助詞、助動詞の特徴などは難しいので2点とする。当たらずとも遠からずの答えには0.5点を与える。停滞ないようにリズムよくどんどん班から代表を出させ、答えを言わせること、よい目の付け所は正解でなくてもできるだけ評価してあげること、ちょっとしたヒントを出してあげることが授業を活発にするポイントである。

- ⑦ 正しい答えが出ない所はヒントを出し、できるだけ生徒から正解を引き出す。
- ⑧ 最後に品詞名を早い者勝ちの挙手で言わせる。2点。正解が出たところで授業者は隠しておいた品詞名を書いたカードを張る。順位が入れ替わることもある。「順位が入れ替わる可能性があるような得点設定」が学習の最後までしてであるとゲームとして盛り上がる。
- ⑨ 全てが黒板に張ったり書いたりできたところでもう一度11品詞名と特徴を確認する。

(6) 生徒の反応

一つのプロックに1枚目のカードが張られた時からそのプロックにはその仲間の言葉しか張れないという所がポイントで、仲間探して班内の話し合いが活発になる。同じ仲間を見つければよいので副詞、連体詞、助詞、助動詞以外はすぐ特徴をつかみカードを張ることができる。全ての学習を終わったとき、いつも生徒が「今まで習ってきた品詞はこんな特徴があり、こんなふうに分類されるのか」とびっくりした表情を見せるのが印象的である。

2 連体詞、副詞の特徴

- (1) 【所要時間】 30分
- (2) 【対象生徒】 中学2年生
- (3) どんな時に使える教材か、どんな気づきや効果があるか

副詞の特徴を理解させるのは難しく、説明で教え込んでしまうことが多い。私は、これを避けたいと思い、以前は黒板に「とても」「ゆっくり」などの副詞を書き、どんな言葉が続くか生徒にどんどん当てながら板書することによりその特徴に気づかせる方法を取っていた。しかし、この方法はクラスによって差が出る。動詞ばかりが出てしまうクラスもあれば、「とても→大きな(連体詞)」「とても→しっかり(副詞)」など、用言以外にも副詞や連体詞にも続くことがあるという例が偶然あがるクラスもある。発言の善し悪しによって授業の成功にムラが出る

のを避けたい、連体詞、副詞の特徴を両方一緒に気づかせたいと思考えたのがカード方式である。応用として、この方法は、四つの助詞の特徴をいっぺんに指導するときにも使える。特に難しい副助詞の特徴に気づかせることができる。

(4) 指導のねらい

カードを張る中で副詞・連体詞の特徴に自然に気づかせる。

(5) 指導の手順と留意点

- ① 連体詞の代表として「大きな」「この」のカード、副詞の代表として「ゆっくり」「とても」を黒板の右3分の1ほどに張る。
- ② 「大きな」「この」「ゆっくり」「とても」の下に続く言葉として以下の25枚のカードを黒板の左3分の1くらいに張る。「鳥」「出かける」「まじめだ」「彼女」「伸びる」「ゆっくり(と)」「宇宙」「休める」「楽しい」「ビルディング」「泳ぐ」「きっぱり(と)」「私」「来る」「友情」「起きる」「環境」「美しい」「静かだ」「歩く」「本箱」「大きな」「明るい」「フレッシュだ」「着陸する」
- ③ 生徒25人を座席に座っている順に机をコツコツとたたきながら指名する。一斉に黒板の前に出てきて25枚のうち好きなカードを1枚ずつ取り、「大きな」「この」「ゆっくり」「とても」のうち「ここ!」と思うカードの下に張らせる。名詞なら「大きな」「この」の下には、どのカードがきても正解とする(例えば「大きな」→「鳥」、「この」→「鳥」)。
- ④ 全部のカードが張れたところで正しい言い方になっているか確認する。
- ⑤ 全てが正しい言い方になっていることが確認された後、「大きな」「この」「ゆっくり」「とても」の下にどんな品詞の言葉が続いているか生徒に問いかける。すると連体詞の下には体言が、副詞の下にはほとんど用言がつくが、副詞や連体詞もつくことに気づく。

(6) 「生徒の反応」

25名に当て、「よーい、ドン」と声をかけると楽しくなる。早い者勝ちでカードを取れるので、2年生でも大喜びで我勝ちに前に出てくる。教え込んでもなかなか身につかない連体詞、副詞の特徴を一度に二つともすんなりと理解させることができる。

3 漢字の成り立ち (資料1)

(1) 【所要時間】 40分

(2) 【対象生徒】 中学1年生

(3) どんな時に使える教材か、どんな気づきや効果があるか

漢字の造字法の学習は、教師の一方的な説明でも理解させることができるが、多くの漢字例を紹介したり、生徒の確実な理解に結びつけることは難しい。しかし、カード掲示方式で指導するとゲーム感覚で楽しんで学べるとともに、現在使っている漢字が昔の中国ではどんな形をしていて、なぜそうした形になったのかまでわかり、漢字への興味・関心を喚起できる。漢字の取り立て指導として効果的である。

この学習は、小学校高学年でもできる。私が勤務していた東京都羽村市は、小中連携を推進している。中学校教諭が小学校を訪れ6年生に中学校の授業をする。この「漢字の成り立ち」の授業は、小学生にも人気がある。

(4) 指導のねらい

漢字の成り立ちを知るとともに漢字への興味・関心を喚起させる。

(5) 指導の手順と留意点

- ① 川 (象形文字)、中 (指事文字)、明 (会意文字)、飯 (形声文字) の例をあげながら四つの造字法を説明する。
- ② この4枚のほかに25枚のカードを用意する (日・町・美・耳・鳴・林・刃・大・紙・問・山・上・伏・子・本・思・天・布・小・牲・行・牛・囚・月・羊・)。この25枚は、それぞれ四つの造字法のどれかに属する。カードの裏には昔の中国の字体、表には現



資料1

在の字体を毛筆で書く。漢字の難易度によって1点から3点まで得点に点差をつけ、点数を示す色ラベルを右上に張っておく。

- ③ 学習は、班対抗ゲームで行う。1回戦は、漢字当て。2回戦は造字法当てである。
- ④ 昔の中国の字体のカードを全て黒板に張る。班から一人ずつが順番に出てきて好みのカードを指さしながら現在の何という漢字かを言う。正解のカードについては、授業者が、どうやって作られたのか2回戦のヒントになるような説明をしながら裏返し、現在の漢字のほうを表にして張る。ここで説明をしっかりと聞いておかないと2回戦で高得点が取れない。間違っていたら正しい答えが出るまで昔の中国の漢字のまま残す。正解が出ないときはちょっとしたヒントを出す。班全員で考え、高得点を目指すよう励ます。

- ⑤ 25枚の全カードの現在の字体がわかったら、次はこれを象形、指事、会意、形声文字の四つに分類する。これも班から一人ずつ出てきて「ここ！」と思うところに張る。短くその理由も言わせる。正解の所にカードを張れば得点できる。
- ⑥ 全部のカードを正確に張り終わったところでもう一度全体を見渡し、四つの造字法を確認する。

(6) 生徒の反応

難易度で点差をつけると俄然燃える。得点が高い班がチャンピオンになるので、1年生では高得点のカードから答えようとする班が多い。しかし、これは難しくなかなか得点に結びつかない。間違えても正解でも楽しく学習でき、雰囲気がいよい。50分の授業では時間が余ってしまうときには「国字」カードを作っておいて読むゲームを取り入れるとよい。

4 二字の熟語の構成 (資料2)

- (1) 【所要時間】 50分
- (2) 【対象生徒】 中学1～2年生
- (3) どんな時に使える教材か、どんな気づきや効果があるか

二字の熟語の構成を指導しておくこと三字熟語、四字熟語の指導の際はそのままだ応用できる。文法で主語、述語、修飾語などの知識を教えた後

指導すると文法の復習にもなる。楽しみながら、しかも自分たちで熟語構成の法則を発見できたという成実感が持てる。これも班対抗のゲーム形式で行う。

(4) 指導のねらい

① 二字熟語の構成を理解し、漢字への興味・関心を喚起する。② 文法の基礎（主語・述語・修飾語など）を復習し理解を深める。

(5) 指導の手順と留意点

- ① まず、(ア)堂々 (イ)温暖 (ウ)有無 (エ)地震 (オ)愛読 (カ)青空 (キ)乗車 (ク)不足 (ケ)東大のカードを黒板に20センチくらい間隔をあけて張る。
- ② これらのカードのほかに31枚のカードを黒板の左側に寄せて張る（暗黒・個々・独立・問答・続々・読書・国連・親友・未納・無職・船出・善悪・握手・選管・早春・急死・人造・昼夜・苦痛・点々・帰国・原爆・悠々・登山・否決・農協・新年・速記・頭痛・軽重・身体）。これらは(ア)～(ケ)のどれかに分類できる。
- ③ 【1回戦】 仲間探しゲーム。班で一人ずつ順番に出てきて、31枚のカードから好みのカードを1枚ずつ取り、(ア)～(ケ)のカードの下に張る。正解は1点。
- ④ 【2回戦】 分類の理由発表。全部のカードを正確に張り終わったところで、縦に並



資料2

んでいる漢字群がなぜ同じグループに属するのかを考える。順番に班ごとに一人ずつ出てきてカードを指さしながら説明させる(例:「この列の二字熟語は主語・述語の関係になっています」「この二字は、意味の上では下から上にひっくり返って読みます」)。説明が難しいものについては得点を2点、3点にする。授業者は、その答えを板書する。

- ⑤ 全部の正しい説明が終わったら、黒板全体を見て二字の熟語の構成を再確認する。

(6) 生徒の反応

この学習は主語・述語の関係、修飾・被修飾の関係などを学習した後ならいつでも行える。したがって、小学校6年生でも可能だと思われる。1時間の授業内に完了すればいつやっても盛り上がり、ほとんど失敗することはない。次時に持ち越すと興味が薄れる。まず「堂々」「東大」などの易しいものから張られていくことが多いが、「温暖」「有無」なども早い段階で気づく生徒が多い。説明が一番難しいのは「愛読(連用修飾語)」や「乗車(意味の上で下から上にひっくり返る)」であるが、これも少しヒントを出せば答えが出る。仲間探しの1回戦も、分類説明の2回戦も緊張感を持って楽しめる学習である。

VI まとめ

生徒に発見の喜びを持たせる指導法として、カード掲示方式を考案した。

生徒にとっては(ア)法則・きまりに自ずから気づくことができる。(イ)明るく活発な雰囲気での学習ができる。(ウ)連帯感、一体感が持てる。(エ)視覚に訴えるので意見を持ちやすいというよさがある。

授業者にとっては、(ア)生徒に発見の喜びを持たせることができる。(イ)授業を活性化し、生徒の興味・関心を持続させることができる。(ウ)教えた知識を過不足なく教えることができる。(エ)いろいろな学習に応用可能で、一度教材を作

ればいつでも使えるという点で、身につけると授業者としてレベルアップできる指導法である。

この指導法は、研修会のワークショップで現役の先生方に生徒役で授業に参加していただいて紹介したり、現在勤務している大学で、SPI対策の「二語関係」攻略法の指導でも使用するが、先生方にも学生たちにも「わかりやすい」「目からウロコの指導法だった」と好評である。このカード掲示の指導は、工夫しだいで帰納法で法則、決まり事、順序などの知識を教えたい授業に広く使うことができる。他教科の授業にも応用可能と思われる。